平成24年（2012年）11月30日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

信州の遺跡

第1号

信州、長野県は遺跡の宝庫です。県内では、市町村教育委員会をはじめ、県埋蔵文化財センター、県立歴史館などで遺跡の保存と活用を進めています。

長野県教育委員会では、これら県内の遺跡の情報をわかりやすくお知らせし、多くの皆さんに文化財を身近に感じ、大切さを考えていただくきっかけになればと考え、情報誌を刊行することにしました。ぜひ、お手にとってご覧ください。

最新報告書から1

柳沢遺跡（中野市）

青銅器の発見

平成19年10月17日、柳沢遺跡で１本目の銅戈が発見され、その後の調査で、銅鐸１個と銅戈７本が一つの穴（青銅器埋納坑）に整然と埋められていることが明らかとなりました。さらに、金属探知機を用いた探査の結果、穴の中に埋められていた銅鐸の破片とともに、新たに銅鐸４個と銅戈１本が発見され、全部で銅鐸が５個、銅戈が８本となりました。

降雪や地面が凍ってしまう冬が目前に迫っていたため、銅鐸・銅戈が埋められていた穴を土ごと切り取って、長野県立歴史館の収蔵庫で調査を進めました。それにより、３次元レーザー測量で青銅器個々の出土位置を細かく測ることができ、土の中から取り上げた銅鐸・銅戈も顕微鏡で観察しながら土を洗い落としたり、Ｘ線撮影で目に見えない微細な亀裂などの状況を把握することができました。

銅鐸のみ、あるいは銅戈のみという事例は数多く知られますが、銅鐸と銅戈が一緒に埋められていた事例は全国的に見ても２例目で、一つの遺跡で銅鐸５個という数量は日本で６番目に多い数です。また、今回発見された銅戈は、北部九州に主に分布するものと近畿地方に主に分布するものの２種類があり、両者が一緒に出土した日本で初め

青銅器が埋められていた穴（横長66cm・銅鐸左、銅戈右）

出土した銅戈（どうか）８本（１号：九州型，７号：長さ約36cm）

出土した銅鐸（どうたく）
５個体（右下：高さ約22cm）

1遺跡で5個もみつかったのは
全国で6番目に多いんだ

どーたくん

ての事例となりました。

これまで弥生時代の東日本には銅鐸や銅戈などの青銅器が無いとされてきました。ところが、北部九州や近畿地方といった弥生時代の先進地域から遠く離れた長野県の柳沢遺跡で、そうした地域と何ら変わりのない状態で青銅器が埋められ、さらに、これまで発見されていない銅鐸と銅戈の組合せが明らかとなったのです。

銅鐸や銅戈などの青銅器は、銅・スズ・鉛を主成分とする銅の合金です。この合金は、スズが３％程度含まれるだけで硬くなる性質で、色もスズの含まれる量が多いと金色に近い色となります。こうした金属の特性を、今からおよそ2000年前の弥生時代の人々が知っており、その上で機能や用途に適したいろいろな道具を作っていたということは驚きです。柳沢遺跡で発見された銅鐸・銅戈の金属成分比は、スズの含まれる量により二つのグループ分けができ、その違いは、形の違いや先に挙げた銅戈の分布範囲を反映しています。

墓地の発見

柳沢遺跡では礫床木棺墓（れきしょうもっかんぼ）と呼ばれる墓が20基発見されました。床に小石を敷き詰めて四方に板を立たせて棺とする墓で、千曲川流域に特有な形の墓です。柳沢遺跡では、この墓が谷状の地形を挟（はさ）んだ両側に幾（いく）つかまとまって墓地を形作っていました。報告書では、弥生時代の住居跡群に近い一つのまとまりを柳沢遺跡で発見された弥生時代集落に伴う墓地とし、中央のひときわ大きい墓を囲むように墓が並ぶ墓地を銅鐸・銅戈を使ったお祭りに深く関わる人々の墓地と想定しました。装飾品が集中して出土した中央の墓以外では、装飾品がほとんど出土していません。墓の規模や出土遺物の量から見ても一つの墓地の中に格差があることがわかります。加えて、この墓地は周囲を溝で囲まれており、墓地の中の墓の数も含めて、墓地にも格差があると考えられます。

銅鐸・銅戈に関連する人々が葬られたと考えた墓地は、墓の配置・分布状況から見て、中央に位

中央の大形の墓（礫の範囲 縦2.5m、横2.2m）を多くの墓が取り囲む

置する大形の墓を造り、順次、外側に墓が造られていったと想定されます。ここで、この規則性をどのように維持していったのだろうかという疑問が生じます。墓標のような目印があったのか、一つ一つに土盛りがあったのか、はたまた、被葬者の生前に用意しておいたのでしょうか？答えはなかなか見つかりそうにありません。

シカ絵土器の発見

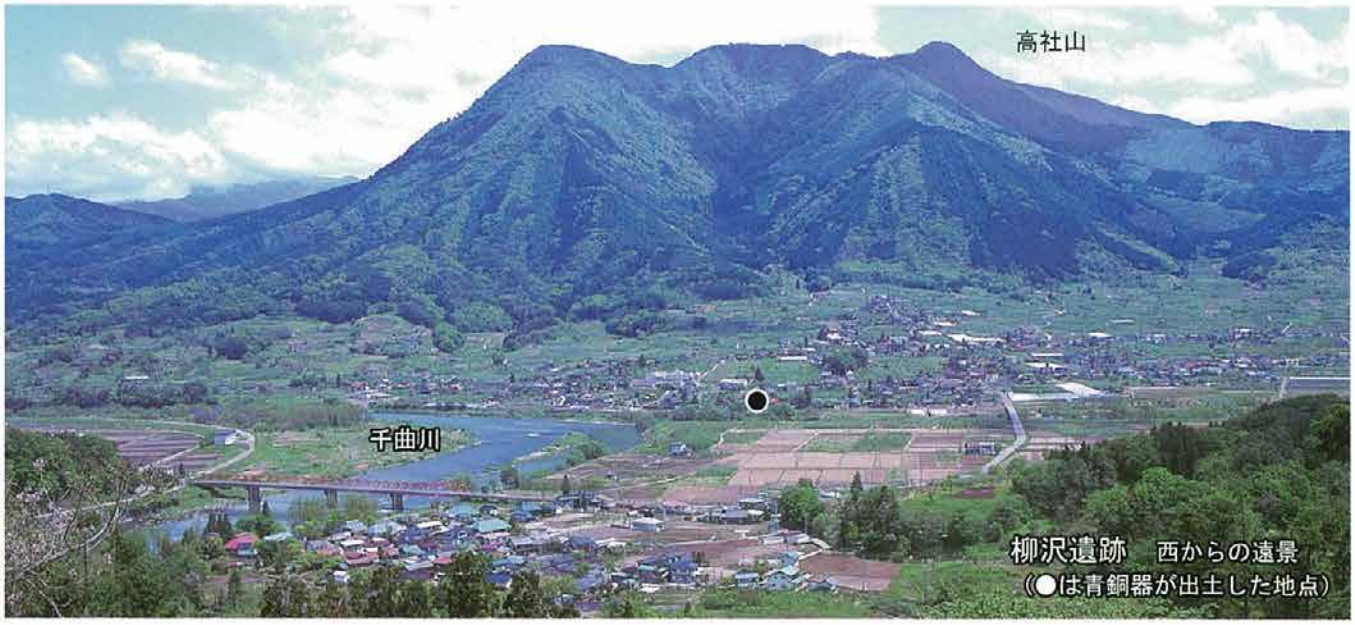
竪穴住居跡に近接する場所から、シカの絵が描かれた壺形の土器が発見されました。その描画方法は、北陸地方で発見されたシカ絵土器との類似・共通性が指摘されています。これまで、県内では記号と思われる線が描かれた土器の出土例はあったものの、明らかに絵画と認識されるものは県内では初めての発見例となります。

弥生時代においてシカは、トリとともに稲作農耕のお祭りのシンボル的な存在であったとされ、土器や銅鐸に多く描かれています。こうした絵画は稲作農耕の先進地域である西日本に事例が多いわけですが、柳沢遺跡で発見されたシカ絵土器は、そうした地域から持ち込まれたものではありません。地元で製作した土器にシカ絵を描いて焼いたもので、稲作農耕のお祭りがこの地域にも浸透していたことを示す重要な資料といえるでしょう。

柳沢遺跡での青銅器の発見は、青銅器並びに青銅器を埋める儀式の分布域を大きく東に、北に拡大しました。このことだけでも重要な発見ですが、さらに、青銅器の埋め方が西日本と同じ方法であることや、地元で作られたシカ絵土器があることなどから、単に青銅器がもたらされたのではなく、この地域に西日本と変わらない文化が根付いていたことを物語っています。その背景には列島を往来するダイナミックなヒト・モノ・情報の交流があって、その中にしっかりとこの地域も位置付いていたといえるでしょう。また、格差の見られる墓の発見から、こうした交流に際して、地域のリーダー的存在がいたことを示しています。弥生時代の社会や文化を考える上で重要な要素が、柳沢遺跡という北信濃の遺跡で揃(そろ)って発見されたことは、これまでの信州の弥生時代像を大きく変換させる重要な発見と位置付けられるでしょう。

（調査第１課長　上田典男）

2012『中野市柳沢遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－中野市内その３－』



柳沢遺跡　西からの遠景
（●は青銅器が出土した地点）

最新報告書から2

東條遺跡（千曲市）

農業の村、そして神社門前の村へ

東條遺跡は、その西側に冠着山がそびえ、東側に千曲川の流れる“田毎の月”で有名な名勝「姨捨の棚田」近くにあります。この付近は“さらしなの里”と呼ばれています。

この地に国道18号線が改築されることになり、東條遺跡ほか７つの遺跡が発掘調査されました。国内初とされる「六角宝幢」（平安時代末期の木製仏塔で高さは180cmほど：長野県宝）を出土した社宮司遺跡も、ここにあります。社宮司遺跡の北には「郡」地名が残り古代更級郡の役所（郡衙）跡も推定されています。漆紙文書や木簡、墨書土器などの文字資料が出土し、役所に関連した遺跡であることがわかっています。東條遺跡は社宮司遺跡の南にあり、古墳時代の後半から役所のできる奈良時代、さらには平安時代の前半まで続く大きな集落遺跡です。文字に関わる資料がほとんど出土せず、役所の力の衰える９世紀の後半には途絶えてしまうことから、役所を支えた村であったと判断されています。

東條遺跡の集落は、その後、鎌倉時代（13世紀）になってから再び活気をみせ、室町時代まで続きます。礫を方形に組んだ建物跡（方形竪穴建物＝倉のような施設か）や井戸跡、漆塗りの椀や皿、輸入された陶磁器、商人や旅人が使用したとみられる硯などが発見されています。遺跡内には、“お八幡さん”で知られた武水別神社に通じる道路（中世の一本松街道か？）が残っており、街道と神社門前に発達した村であったと推定されています。この村のようすを、現在も武水別神社門前にある旅館や商店の町並みに重ねてみると、歴史の重さを感ぜずにはいられません。

（調査第３課長　町田勝則）

2006『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書1 －千曲市その1－ 社宮司遺跡ほか』

2010『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書2 －千曲市その2－ 社宮司遺跡六角木幢保存修復編』

2012『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書3 －千曲市その3－ 東條遺跡ほか』

ドキジロー

古代の更級郡（さらしなぐん）の役所（郡衙・ぐんが）があったところだよ

中世の方形竪穴建物跡（東條遺跡）

更級郡衙の推定される千曲市八幡地区（棚田より撮影）

2006～2012に刊行された発掘調査報告書

出土した中世の硯（東條遺跡）

※上の写真中の文字に間違いがありました。
正しくは「郡」集落　です。

最新報告書から3

西一里塚遺跡群（佐久市）

弥生時代の木製品が出土

西一里塚遺跡群は、佐久平駅南の水田地帯にあります。周辺には「流れ山」という小高い丘が多くみられますが、これは約２万数千年前に浅間火山のひとつである黒斑山の大噴火で発生した土石なだれの残丘です。

今回の調査区は南北約580mに及びましたが、この流れ山と微高地、それに低地と多様な地形の上に営まれていたことがわかりました。流れ山や微高地では弥生時代中後期の集落跡、墓跡が調査されましたが、低地では平安時代から近世の水田跡４面がみつかりました。弥生時代の調査面では、水田跡は確認されませんでしたが、溝跡や木材溜まりなどがみられ、木製品が多量に出土しました。なかでも鍬身の穴に差し込む直柄にも、鍬身をひもでしばる曲柄にも装着できるという両用可能なものは珍しいものです。木製品には他にも破風板等の建築部材や樋などもみられましたが、佐久地方では弥生時代の木製品は出土することが少ないため、貴重な資料となります。

左：鍬身（長さ45.8cm）
中：直柄（長さ84.8cm）
右：曲柄（長さ81.8cm）

左の鍬身は中の直柄にも右の曲柄にも装着できる両用タイプです。

人形土器を発見！

また弥生時代後期の墓域からは、頭や顔、腕がみごとに表現された人形土器が出土しました。頭頂と底の一部が欠損していますが、残存する高さは28.2cmで、胸には小さな孔が開いています。顔はやや上向きで、鼻が高く、口を「⊥」状に刻んでいるなどやや誇張した表現が特徴です。全体像がわかる弥生時代の人体造形として逸品といえるでしょう。墓域から出土したことや誇張した顔面から推測すると、墓地において邪気を防ぐ「墓の守り人」といった役割を果たしていたのかもしれません。この他にも鉄釧や鉄剣といった稀少な金属製品が出土したのも特筆できます。

こうした貴重な遺物の出土や佐久平では調査事例が少ない低地をはじめとする多様な地形に応じた土地利用が明らかとなってきたことが今回の調査で得られた大きな成果といえます。

（調査研究員　櫻井秀雄）

2012『濁り遺跡　久保田遺跡　西一里塚遺跡群　中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４－佐久市内４－』

人形土器（ひとがたどき・高さ28.2cm）

ひとがっちゃん

もっと知ろう　長野県埋蔵文化財センター

体験発掘の実施

発掘調査を公開!!　遺跡の発掘や遺物洗いなどを実体験。　随時受付

最新の情報は
ホームページをみてね
長野県埋蔵文化財センター　検索
http://naganomaibun.or.jp/

かがみちゃん

調査成果の公開・長野県の遺跡発掘

発掘調査した1年間の成果を公開。遺跡発表会・講演会、埋文体験デー　3月・4月、7月開催

施設公開・考古学チャレンジ教室

埋文の仕事に挑戦!!　土器の接合や拓本を体験。勾玉づくりにチャレンジ　8月の2日間

勾玉づくり

埋文体験デー

講演会

考古学出前授業

歴史教育をﾊﾞｯｸｱｯﾌﾟ地域の遺跡、土器・石器を実物で解説。　随時受付

職場体験受け入れ

「自分探し」をお手伝い。学校現場との連携。　随時受付

埋文ほっと情報

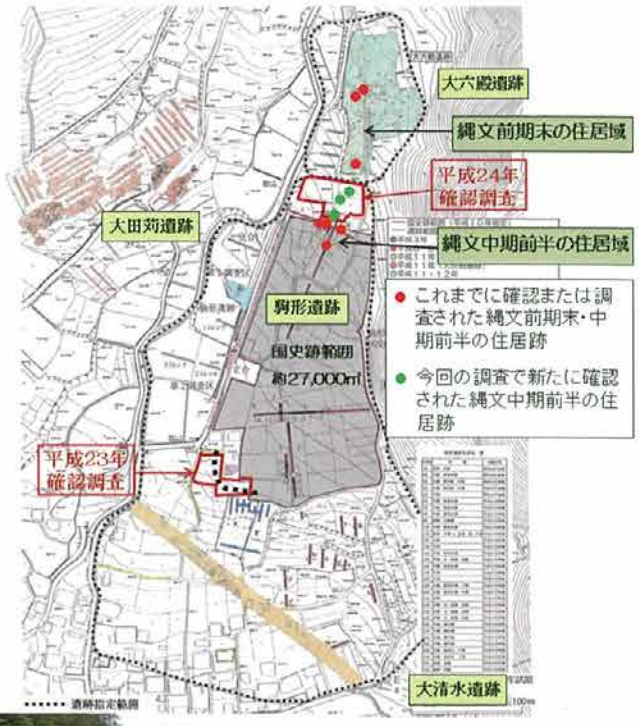
茅野市駒形遺跡　所在地：茅野市米沢

黒曜石原産地として名高い霧ヶ峰の南麓、桧沢川によりつくられた扇状地上に遺跡はあります。この地域にある縄文遺跡は、黒曜石を大量に出土することで知られ、その交易や流通の実態を追究するための重要な遺跡として、駒形遺跡は平成10年国史跡に指定され保護されました。

駒形遺跡は桧沢川の南岸に位置しますが、北側には縄文時代前期と後期の大六殿遺跡があります。茅野市教育委員会は、駒形遺跡の史跡整備を進める上で、この２つの遺跡の関係を追究しようと、遺跡範囲確認の調査を行うことにしました。

調査の結果、中期前半の竪穴住居跡３軒が確認され、２つの遺跡が同一である可能性が高くなってきました。つまり駒形遺跡は、縄文前期から後期まで継続する大きな集落跡で、縄文人は時期ごとに居住場所を移して長い間、集落を営んでいたものと考えられそうです。今年は11月末まで確認調査を行いました。

（茅野市教育委員会　小池岳史）



史跡指定範囲と駒形遺跡

範囲確認調査の状況
（黒い部分が竪穴住居跡）

長和町　黒耀石のふるさと祭り

和田峠・星糞峠など黒耀石原産地をもつ小県郡長和町でさる８月 26 日第８回黒耀石のふるさと祭りが開催されました。長和町では平成 17 年から、毎年１回黒耀石のふるさと祭りを行ってきました。

当日は、国史跡星糞峠黒曜石原産地遺跡から麓にある黒耀石ミュージアムと遺跡広場でさまざまなイベント、ワークショップが催されました。峠では現在、星糞峠第１号採掘跡を公開展示するために発掘をしています。地表下３ｍまで縄文人が採掘をした様子を見学することができました。

午後は遺跡の森コンサートです。町の黒耀石親善大使でもあるシンガーソングライターの美咲さんと地元小学校のジョイントコンサートも今年で４回目を迎えました。

ワークショップでは、投げ槍、弓矢、吹き矢などの狩りの体験、火起こし、旧石器時代の石焼きバーベキューや縄文クッキー、土偶を真似たフェイスペイントや縄文服のデザイン、また、発掘体験のブースも新たに開設され大勢の参加者で盛り上がりをみせていました。今年は、これまで個別に行われていた美ヶ原トレイルラン、高原まつりなどの各種イベントを連動させ、「'12黒耀石ウィーク」として同時に開催しました。その結果、異業種に及ぶスタッフの横の連携はもとより、今まで遺跡のお祭りに参加されなかった様々な方が一同に集まり、地域振興の一翼をになうものとして、多くの方々に歴史遺産や考古学の楽しさ、魅力を身近に感じてもらう事ができたようです。

（黒耀石体験ミュージアム　大竹幸恵）

石焼きバーベキューを満喫

長野県教育委員会だより　県内の発掘調査の状況（～7月終了）

長野市　浅川扇状地遺跡群

長野女子高校校庭遺跡（ながのじょしこうこうこうてい）

2012. 2. 27～5. 31　調査

長野市埋蔵文化財センター

●弥生時代後期と古墳時代中～後期の集落跡　弥生時代の焼失住居跡の確認と北陸系土器の出土。　（調査機関より写真提供）

松本市

県町遺跡（あがたまち）（第17次調査）

2012. 3. 1～7. 10　調査

松本市教育委員会

●弥生時代中期と古墳時代後期の集落跡　弥生時代の礫床木棺墓跡3基を確認。特に焼失痕跡は注目される。（調査機関より写真提供）

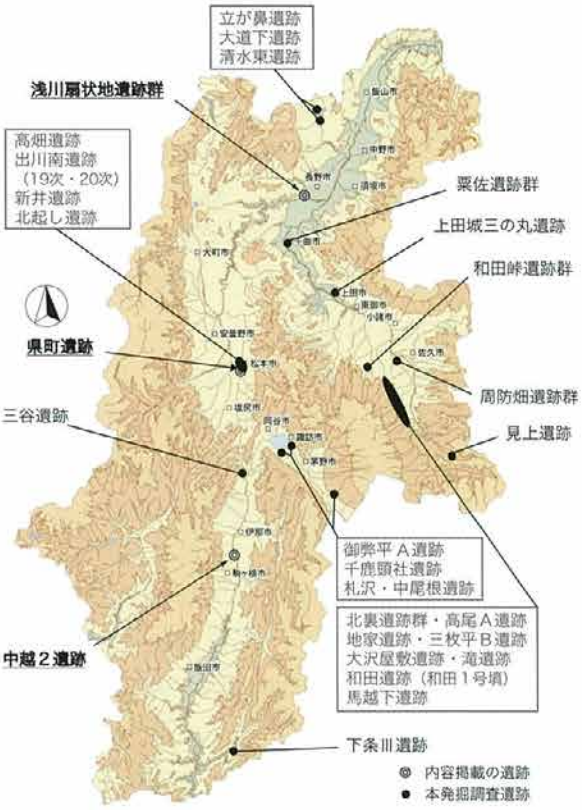
宮田村

中越2遺跡（なかこし）

2012. 3. 16～4. 20　調査

宮田村教育委員会

●縄文時代中期集落の東端部を調査。竪穴住居跡より、底部を欠いた埋甕を確認。　（調査機関より写真提供）



考古学の窓　～縄文時代中期の釣手土器（つりてどき）～

釣手土器は、鉢形の体部にブリッジ状の釣手を掛け渡した土器です。内部にすすが付いたり、火熱で変色した跡が残るものが見られ、灯火具と考えられています。現在まで約450点がみつかり、長野県は220点ほど、山梨県59点、岐阜県42点、富山県37点が多く、東京都・神奈川・埼玉・群馬・静岡・愛知・石川・福井県に分布しています。

釣手土器は、立体的な把手や装飾がもっとも発達した縄文時代中期中頃、長野・山梨県の八ヶ岳西南麓地域で出現し、周辺地域へと広がりました。中期後半をピークに地域色あるさまざまなタイプが現れ、中期終末頃には急速に減って釣手付の深鉢に変化しました。最盛期の中南信地方の大規模な集落でも、20軒に１個あるかないかという、希少な土器です。釣手土器は完形に近い状態で住居跡から出土する場合が多く、祭壇（さいだん）を設けた奥壁や中央部の床面に置かれています。おそらく屋内で行う儀礼用のランプだったのでしょう。

全国の半数を占める長野県でも千曲川流域では30点と少なく、北信では２点のみでした。ところが中野市千田（せんだ）遺跡からは４点以上が出土し、分布範囲を北に拡大することとなりました。千曲川に面して50軒以上の住居跡を残した大規模な集落では、釣手土器を作らなかった新潟県と共通の土器を主体に、中南信の土器も少数見られます。もともと数少ない釣手土器は、遠来（えんらい）のまつりの道具として当時の人びとから注目されたことでしょう。

（主任調査研究員　綿田弘実）

千田遺跡出土の釣手土器

長野県教育委員会事務局　文化財・生涯学習課
〒380-8570 長野市南長野字幅下692−2
TEL 026−235−7441　FAX 026−235−7493
メール bunsho@pref.nagano.lg.jp

(財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963−4
TEL 026−293−5926　FAX 026−293−8157
http://naganomaibun.or.jp/

印刷：信毎書籍印刷株式会社